實條公御詠草

七四一

特別
へ2
4867
22

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛永十六
藤愛　四十五才
四十さい

第七十番　此月雨のい高はう方出合
外様れハ初花之
新緑勝範　懐　西峰
菊もさし　天目銅のわきまへと
まつ茶の何の世のならひ
扇萬世栄　寿亀お覧満
まつ花ハ心とはなれて
色ひさき巻のかすみえる
惜春音
知也初夏ハかさねみや
何の花も春ハかりゝと
新久筆

いのちあれは　あきにも雨は　ふ
むら人かゝへてくるゝ
まはしてよみによ　三日月
まかれし
もろ人かへりの世の中の
まゆもうきし　名の底よ
十月廿日中川とふ人の
えらもし　ける
あかしにもてなさせ　よりし
君まはれぬらぬ火のわし
山霞　十二月一日秋の末ヲ対面し
のかつらを君にもさた太のの

君うきよはれよ見しる
神出来
御人とりしとふ海のかつをそ
かりもみとゝやまさくてぬる

慶長十六年

梅花久芳　主芳十九才

ゆかしさハ見ぬ枝のむかし

こころしにほふ梅の春かな

月前閑居　自在か照陽明

此月陽明院か庭の　ト

元来　[illegible]

玉さへけふにまさるてほり

けふも去年のはるに

月前草露

月夜のよしとしれしこてて

[illegible]の春もうつり

若草五点

打草にあれそふくてかけつて

たのむひかりひよ秋のつもてら

元日

君か代はちとせの春をむかへぬの

翁とはれにて

元日　進路早蕨

[illegible]

ちかひかへいのよす

さけてれもみちしら

陶房所写

春をえん絵のおもしろ人も
かけしさや唐まで見む

山霞　其角新下

きのふ夜明けて二月の
山もかすみにけるかな

若葉

おりしるみどりさす[illegible]まるも[illegible]
わか葉さへもつやさま

[illegible]

村さめや軍いろ色の[illegible]
みどりさへあらはしけり

述懐

世をすてし[illegible]たづね
たのしみあそてさて[illegible]

廿日　花のちり[illegible]
[illegible]桜のあとを[illegible]

このさくら日影のさかり
やまぶきの花も三月や

廿六　花みる夜のさくら
とみをしも[illegible]

せんしら花をはなれて[illegible]
ともなく[redacted]あき[illegible]
三月　花見ぬ[illegible]ゆく[redacted]

しゆうつきてつりしらへ
海中のしらつきに三史はんへか
叢まみゆらしめりてしき
なくこけのもとくるしら
とうり白の身をもてしきる身の
けてをれたのむ菜のうき橋也 祇園
とう了の身をもうれへても
うきまくきこ暮のうき橋
牛ま女のうかれ [redacted] 柳 [redacted]
萩れ井たの菜れ糸をと 三え
秋草の野へかねもゑくよ
みれく夜のうきつりとうみ
寒道霜 哥十三 今上東
一品姫し 敬
蕉弁下し

世は三うきさ三のたうとえし
神ぞ色めたてうさね つきて
曉神樂 小野山添番記 東代初発 季宿 新者右日
けさくの真なけつてうろ
本きしてしら果めせまれよ
新菊芝
悪きみれ一よろく餓鬼
あやのためとたきてせし
菽莉 禁中ハ日次ノ故之 作者不同 結縁之
ちりてもらる香とまうけれ
とこれをとうえくれめや

烏角堂

けふこそやうもすゝしき中川の
風のまよしみれてなく

雲ま草丸

おもひ入れ中ハ花ふかの草まれや
つゆかよひし此ゆの世もあらし

織女契久　七夕　杜宇 種戚 [illegible]

かりと墨やうきん君ろ代の
さらもはすめ秋のもりと
七夕揚ねまた七夕の花
人の見るなみ見かれさくる也ま

なかりやうもうれまかりたの
夢のゝ花すさ常ぬ女はあれ

七夕書

七月廿三庚申よ人とぬ風を
まそかつもし
世をも人のこころしつきかれ
わかまれのはの旅乃ゆるる

新秋参　[illegible]

時うけす花のかの風まかちも
あれのゝきや秋なかりん

森如稀

荻よりしまのきおのそへ荻の
ゆかれハ風やこらきかりん

寄月恋

つれなさも月やうつしてかはらまし
いくよひとしもちきりおきけん

月前風 八月二日会始

名も秋の月にさそはれて雲のうへ
やまのはにかゝらぬ雲は風そふくも

月前虫

住わひてうらみのこるの月よりも
もきかたの月のなきそかひきる

月前鹿

さを鹿のしかしもかれのなくこゑに
せとさそふ月影のかなしみ

月前恋

ありてなき人のあとにあかぬ月
おもはぬ方に夢のゆめの中とて

月前猿

やまをさかひてしもの一縁
花を月とみるめのちの夢の
ありて

寛政十二年

元日諷経

御家御園生し松乃緑も見

左賀屋志代やく千とせの寿

十九日　林叢寺にて御見舞　南部

松笑寿之春

寿は時に書入されは候の

三てふの色の花にしてこそ

八幡は法ま御布日花の候

明石気色　竹の

ふとこれ三ゝ内の事文

風のまへなく身の

晴雲

有りて御かへるこゝ舟

まかれしらしてこそいとし